



国指定史跡 決定!! 「デーノタメ遺跡」

令和6年10月11日、北本市の「デーノタメ遺跡」が**国指定史跡に指定**されました。北本市に国指定の文化財が誕生するのは、大正11年に「石戸蒲ザクラ」が指定されて以来、実に102年ぶりのことです。

日本を代表する縄文時代の遺跡の一つとなった「デーノタメ遺跡」を、未来へと大切に守り伝えていきましょう。

デーノタメ遺跡とは？

デーノタメ遺跡は、大宮台地内の江川支流の台地から低地に広がる、縄文時代中期から後期の集落遺跡です。中期の環状集落は「関東最大級」で、遺跡の規模は約6ヘクタールです。

昭和44年に発見された後、発掘調査を続けてきたところ、平成20年の低地遺跡の調査によって評価が高まり、全国から注目される遺跡となりました。

昭和40年代までは遺跡の要に「デーノタメ」と呼ばれる湧水によるため池が存在していて、縄文時代には重要な水源であったと考えられています。

遺跡名の「デーノタメ」とは、このため池の名前が由来になっています。



昭和44年頃のデーノタメ遺跡付近
(吉川國男氏提供)

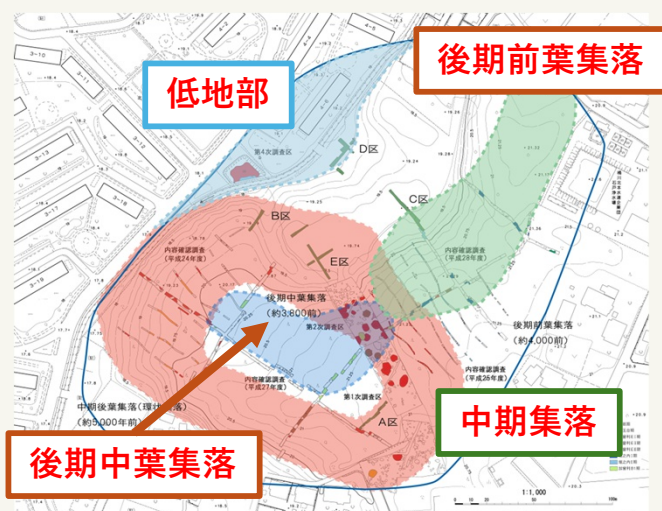
デーノタメ遺跡の特徴は？

デーノタメ遺跡の大きな特徴は2つです。

1つ目は、5,000年前の中期集落が「関東最大級」、4,000年前の後期集落も規模が大きく、1,200年間も長期に継続していたことです。このため、縄文人の生活の変化を一つの遺跡の中で見通すことができます。

2つ目は、集落の広がる台地の下に低地遺跡が存在していることです。低地遺跡は縄文人の水場で、通常は腐ってしまう植物の種や実、漆塗土器、昆虫の羽などが水漬けのまま、真空パックの状態で保存されています。

集落と水場の2つがセットで残る遺跡は大変珍しく、この遺跡の大きな特徴なのです。



デーノタメ遺跡の集落展開図

デーノタメ遺跡は「縄文のタイムカプセル」

平成20年に行った第4次調査では、台地下の低地部を初めて調査しました。その結果、全国的にも事例の少ない縄文時代中期の低地遺跡が発見され、さまざまな分析調査により、当時の環境や食生活、その変遷などの様々なことがわかってきました。

高度な漆文化

低地遺跡では、縄文時代の漆文化が埋もれていました。「漆」の痕跡としては、ウルシの木材や花粉、木胎漆器、漆塗糸のほか、約500点の漆塗土器が出土しています。

特にウルシの花粉と木材の出土は、縄文人が集落内でウルシ林を管理し、ウルシを掻き、漆液を精製し、ベンガラや水銀朱を顔料として、漆製品を製作していたことをうかがわせています。



漆塗土器



漆塗土器

植物資源の利用状況

低地遺跡における花粉や種実、木材などの調査の結果、ムラの周囲は食料資源となる豊かな森に囲まれていたことがわかっています。

縄文中期・後期を通じてクリ、クルミ、ナラガシワなどの堅果類が重要な主食となり、後期になるとトチノキ林の拡大によって、その利用が盛んとなります。

また、クルミ塚の分析ではニワトコ・クワ・サルナシ、ヤマブドウ、キイチゴなど、ベリー類の利用が確認されています。



クルミ塚



出土したトチノキ

縄文人のマメ栽培

縄文時代は、定住しながら狩猟と採集を生業とし、シカやイノシシ、さまざまな植物、魚介類を食料資源としていました。また、最近の研究では縄文人が植生を管理し、マメ類やエゴマなどを栽培していたことも明らかになっています。

デーノタメ遺跡では、マメ類のダイズとアズキが炭化した種子や土器圧痕として確認され、とくにダイズの圧痕は、栽培によって大型化していることも確認されました。また、低地遺跡では昆虫の羽などが出土し、とくにヒメコガネが多い傾向にあります。ヒメコガネはダイズの葉を食べる害虫のため、当時のムラの周りにダイズ畑があったことを示しているのかもしれません。



アズキ圧痕のある土器



アズキ圧痕



出土したヒメコガネの頭部

